022103	融和随想	森梁香	言語	2	56	28
022104	政界第一線に立つ人々	小松丘彦	言語	2	56	28
022105	護れ祖国の生命線：光輝三千年	吉田侃晁	言語	2	56	28
022106	庶政一新と改革運動	吉田侃晁	言語	2	56	28
022107	日本々国民に与ふ	蔡培火	言語	2	56	28
022108	東亜の子かく思ふ	蔡培火	言語	2	56	28
022109	非常時局と財閥は如何に闘つたか：軍部と協調なるまで　親軍派財閥の解剖	細谷晃	言語	2	56	28
022110	英国の極東政策は如何に転換するか：警戒すべき各方面の観測	安芸浜夫	言語	2	56	28
022111	現代軍部論	永井三郎	言語	2	56	28
022112	戦線に躍る日英米の勝敗	岡山啓之助	言語	2	56	28
022113	戦線に躍る日英米の勝敗	岡山啓之助	言語	2	56	28
022114	工場照明改善の急務	石川安太	書	2	56	28
022115	近視眼に関する文部省訓令に就て	石川安太	書	2	56	28
022116	販売と広告講演集	石川安太	言語	2	56	28
022117	神道丸山教の道すぢ	元木福治	言語	2	56	28
022118	日本を狙ふユダヤ財閥の陰謀	竹居半二	言語	2	56	28
022119	危機一九三六年と赤露の脅威：日露若し戦はば	佐藤鉄城	言語	2	56	28
022120	一九三六年の危機と米露の脅威	佐藤鉄城	言語	2	56	28
022121	危機一九三六年と日米の海軍：日米若し戦はば	佐藤鉄城	言語	2	56	28
022122	国際弁証法	佐藤明之	言語	2	56	28
022123	危機線に立つ日支：日本はどうする	水野源太郎	言語	2	56	28
022124	焦燥の英国：完全に失敗した支那援助工作	安芸浜雄	言語	2	56	28
022125	ソ支密約とその後に来るもの	杉山捷三	言語	2	56	28
022126	英国撃つべきか	杉山捷三	言語	2	56	28
022127	有馬イデオロギーの検討	新井政雄	言語	2	56	28
022128	世界の秘密結社を探る	黒島大三	言語	2	56	28
022129	支那抗日団と藍衣社の正体	黒島大三	言語	2	56	28
022130	日本学の樹立と亜細亜鎖国	正真正義	言語	2	56	28
022131	此一戦・世紀の始め	正真正義	言語	2	56	28
022132	某国スパイの探つた日本：附・スパイのテクニック	池村新三郎	言語	2	56	28
022133	戦争は不可避だスパイはどう活躍するか	池村新三郎	言語	2	56	28
022134	近衛文麿公の思想と経綸	城北外史	言語	2	56	28
022135	労働組合の知識	紺野英一	言語	2	56	28
022136	岡山市興信録：附・郡部人物伝	藤野直秀	言語	2	56	28
022137	定員定率の要論：如何にすれば人の配置を合理化して人手を100％に活用し得るか	岸本一	言語	2	56	28
022138	日本戦時経済の進む途	永田耀	言語	2	56	28
022139	品詞仮名遣及送仮名法	村上直治郎	言語	2	56	28
022140	渡辺華山の話	村上直治郎	言語	2	56	28
022141	日ソ停戦協定とソ聯の陰謀	高木伍郎	言語	2	56	28
022142	皇道翼賛のために	木村徹英	言語	2	56	28
022143	新体制運動と融和問題	木村徹英	言語	2	56	28
022144	国政改造闘争の全貌	西山圭介	言語	2	56	28
022145	乱舞するスパイの群れ：戦局秘話　機密の裏に機密	石坂精一	言語	2	56	28
022146	教育の現在を批判す	加藤満照	言語	2	56	28
022147	猶太禍	西宮三城	言語	2	56	28
022148	妖雲漂ふ皇国を語る：国難を救ふ政策	田代強八	言語	2	56	28
022149	消防とはどんなものか？：消防早わかり	柿添栄	言語	2	56	28
022150	非常時に際し青年幹部へ	北原康哉	言語	2	56	28
022151	財閥功罪史	太田義孝	言語	2	56	28
022152	北支問題の重大性と国民の決意	堤章	言語	2	56	28
022153	議会制度の個人主義的解釈を排す：尾崎行雄氏の講演「議会政治の前途」速記を読みて	松永芳市	言語	2	56	28